

Title	異文化共存と開発
Author(s)	岡本, 真佐子
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1994, 20, p. 227-246
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7915
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

異文化共存と開発

岡本真佐子

はじめに

経済格差は人々の間に、地域間に、そして国家間に緊張や摩擦を生じさせる原因になると漠然と考えられている。漠然と、というのは、各国の経済力やその格差を明らかにするために行われる数値計算と、異なった集団間の緊張関係はもともと質の違う問題なのだけれども、その割には経済成長の必要を説く場合に「国際社会の平和共存」といったスローガンが掲げられ、それなりに好意的に受け入れられているように思われるからだ。異文化間の平和的共存を目標として経済開発が行われることに異議を唱える人はいないと思うが、両者を短絡的に結びつけることは危険で、かえって「平和共存」の実現から遠ざかってしまう場合もある。近代化理論の一環としての発展理論等の中で、経済格差の問題は異文化間の関係と具体的に関連づけて論じられることがほとんどなかった（あるいは余りに単純に結び付けられた）ために、経済格差の解消と異文化間の摩擦の解消は別個の課題とされるか、または一方が解消すれば他方もそれに引き続いて自然と解消に向かうと考えられてきた。しかし、70年代末からの「エスニシティ」研究が次第に明らかにしてきたように、今日経済成長が著しい地域では、文化の問題と階級（階層）の問題とは多くの場合重なりあって現れてくる。現在の世界各地の状況をみても、経済開発が積極的に行われ数値の上では成長をとげているような地域で、かえって異文化間の緊張や摩擦が高まり、紛争にさえ進展している。経済開発を実施するプロセスの中に、このような異文化間の共存を困難にさせる面が内包されているということは十分に考えられるだろう。ここで一般論としての経済開発の性格を論じることはできないが、ある地域的文脈のなかで現在進められている開発計画が、どのような点でそこに存在する諸文化ないしそれらの関係に影響を及ぼしているのかを、まず探ってみようと思う。以下ではスリランカで行われているマハヴェリ河開発計画を事例としてとりあげる。

1. マハヴェリ河開発と「水」

スリランカのほぼ中央部、コトマレ丘陵に発するマハヴェリ河はスリランカ最長（全長207マイル）、流域面積も国内最大を誇り（25500平方キロメートル）、その流れは山間をゆったりとカーブをきりながら島の北東部沿岸のトリンコマレでベンガル湾に流れ込む。マハヴェリ河は他の川と区別してマハヴェリ・ガンガと呼ばれるが、この「ガンガ」とはインドのガンジス河に由来する名称で、古くインドの大文明にまでさかのぼる伝統を人々に彷彿とさせる。

このマハヴェリ河の総合開発計画は、スリランカの国を挙げての一大総合開発計画で、計画の期間の長さ、計画に含まれるプロジェクトの規模と多様さ、人々の生活に及ぼす広範囲の影響のどれをとっても、スリランカにおける開発の中心をなしており、そのために膨大な資金や資源だけではなく政治的、文化的諸力が一切切動員されてきたという点でも、大きな特徴をもつ。開発計画そのものが経済成長を目的とする経済的行為であっても、どの計画をどのように実践するかが政治的選択であるという意味では、すべての開発計画は政治的なものといえるし、また計画の遂行にはどのような局面においても文化的な解釈が作用するのだという意味では、あらゆる開発に伴って文化的な力が働くということではある。しかし、マハヴェリ開発についてとりわけその傾向を強調するのは、この計画が進められる過程で付随的に生じてきた事情が、もともとは開発と直接関係のないレベルで進行していた文化的なダイナミズムと連動し、その勢いが増幅されるような形で新しい状況が形成されていったと考えられるからである。しばしば開発ナショナリズムという観点から、開発計画を利用した政治的力の発動という利用的・操作的な面が強調されるが、スリランカにおいてはこの動きは先の文化的ダイナミズムと時には矛盾し、時には相補的に作用しあいながら、社会全体を巻き込むようなひとつの主張を作り上げていく。

マハヴェリ河開発計画はこのように、スリランカの近代の歴史、とりわけイギリスの植民地支配からの独立以降の社会の歩みのなかにしっかりと根を張っている。それがこの国の異文化間関係の中にどう埋め込まれてきたのか、また現在その関係に対してどう作用しているのかについての概略を描くことを本稿での目標としたい。そのためにはこの国の地理的状況、そしてマハヴェリ河開発において特に重要なメタファーとして現れてくる「水」をめぐる文化的背景について簡単に触れておくことが必要だろう。

スリランカはインド大陸の南端からわずかに東側の、インド洋に浮かぶ一粒の雫のような形をした小さな島である。島の面積は約6万6千平方キロメートルで、これは北海道の約8割にあたる。島全体が北緯10度以南に入り熱帯に属してはいるが、島の中は土地の高低差や雨量の多寡から、少し移動すると気温から景色から全く異なってしまい、実に変化に富んでいる。島のほぼ中央部、やや南寄りが高地になっており、この高地にある都市キャンディは、およそ2

千年続いた旧キャンディ王国の首都として現在でもスリランカの人々の精神的核をなしている。またイギリスの植民地支配下にある間に、この丘陵地帯の斜面を利用して紅茶のプランテーションが積極的に行われたため、そのプランテーション労働者としてインドから連れてこられたインドタミールの人々がこのあたりには今でも多く住んでいる。スリランカには一年に2回モンスーンの季節があり、11月から3月にかけてのモンスーンはほぼ島全体にわたって雨を降らせるのに対して5月から9月のモンスーンは島の南西部にしか雨をもたらさない。そのため国土の約4分の1にあたる南西部の湿潤地帯（ウェットゾーン）を除くと、年1回のモンスーン期以外はほとんど雨が降らないという乾燥地帯（ドライゾーン）が広がっている〔図1〕。中央高地と沿岸部の気温差もそうだが、湿潤地帯と乾燥地帯の移り変わりも急激で、車で移動しているとまるで線でも引いてあるかのようにいきなり景色が変化する。日本で季節にせよ何にせよ微妙な移ろいに慣れているせいか、この極端さは特に強く印象に残り、気候や景色に限らずこの社会ではなにかにつけてこの極端さがものごとの基調にあるように感じられる。また、さらにこの国についての印象を付け加えるならば、多様性と流動性ということになるだろう。たとえば民族をとりあげても、小さな国土の中に現在およそ1700万人の人々が住み、そのうちシンハラ人が約74%、タミール人が18%を占め、その他にムスリムや、ヨーロッパ人との混血であるバーガー、少数民族のヴェッタなどがある。このような民族の多様性はまた、宗教や言語の多様性でもある。シンハラ人は主にシンハラ語を話し仏教徒が多く、タミール人はタミール語を母語としておりヒンドゥー教徒が多い。宗教的にはこのほかイスラーム教やキリスト教があり、言語としては英語を母語とする集団もある。

植民地時代に形成された一部エリート層には英語と母語のバイリンガルもいるが、数としては非常に少数で、シンハラ語とタミール語は異なった系統の言語に属するために両者の間では直接に意思の疎通は難しい。このためスリランカでは言語の多様性が遠心的に作用し、国家としてのまとまりを困難にさせる一因になっている。しかしこのモザイク的な国のなかで人口の移動は比較的激しく、それがこの国に変化を常態とさせる一因ともなっている。先に触れた、プランテーションのためのインドタミールの人々の移住もそうだが、土地不足から新たな耕地を求めて北部や東部に入植する人々が多く、さらに近年になって都市が発展してくると農村から都市へと絶えず人々が引きつけられてくる。変化、多様性、流動性、これらはスリランカの魅力的な特徴を作り上げている一方で、深刻な困難を生む土台

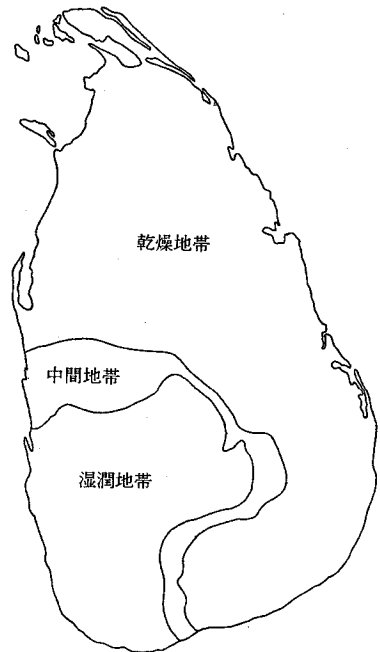


図1

ともなっているといえるだろう。

農業を基幹産業とする国にとって水が重要であることは言うをまたないが、農業を営む人々にとって農業が単に生活の糧を得るためだけのものではなく、生のあらゆる領域を巻き込むものであるように、スリランカにおいては、水は人々の生活世界に深く意味の根をおろしている。水は「心身を清める」が、これは実際に汚れを清めると同時にけがれを祓うという「浄め」の意味でもある。水にあるとされるこうしたけがれを祓う力は、人々に不運や苦難をもたらす悪を滅するはたらきにも通じると考えられ、病氣治しの儀礼などにおいても「聖なる水」が登場する。水が生命を育み、実りをもたらすことから生命や豊かさの象徴となり、新たなはじまりを象徴的に表す際にも水が用いられる。また水をもたらす者、雨を降らせる者としての神、あるいは王という結びつきは広く深層の意識として共有されており、水が聖なるものであるがゆえにそれをもたらす者もまた聖なる力を有するものだと考えられてきた。¹⁾

人々が水に対して抱いているこのようなイメージは、状況の変化に伴って拡大したり作りなおされたりしながら、水は多様で重層的な意味を運ぶメタファーとしてフォークロアや日常の語りなど至る所に顔を出す。永い年月にわたって積み重なり編み上げられてきた意味は、人々が新たな状況に直面したときにそれを受けとめる緩衝材になるだけではなく、それらの状況を意味の流れを逆上って伝統の懐へと結びつけるように作用することもある。マハヴェリ河開発計画を経済的用語や数値で説明するときどうしても皮相な印象を受けるのは、この国での「水」のもつ意味の広がりや深さゆえであり、それは単なるメタファーをこえて宗教や支配の正当性と繋がって現実という位相に姿を現してくる。この開発計画が進むにつれて現れてきた困難は、計画が人々の意味の網の目に埋め込まれるに従って、計画そのものの枠をこえて広がっていった意味やイメージの連鎖に深く関わっており、計画の内容自体に発しているわけではない。ただ、開発を実施するというのは紙の上での線引きに終わるものではないのだから、多かれ少なかれいつも文化の介在する意味の広がりという裾野を伴ってしか、現実という領野には立ち現れえないものだろう。

開発下の生活 — システムHの現在 —

1964年から国連開発機関（UNDP／FAO）によってフィージビリティスタディ（開発の実施可能性をはかる調査）が行われた結果、1968年正式にマハヴェリ河開発計画（マスタープラン）がスタートした。マハヴェリ河はスリランカ国内では最長で水量も豊富とはいふものの、それほどの大河ではない。そこでこの河の流れをポルゴラ、ヴィクトリア、モラガハカンダの3地点で変え、トンネルや水路を通してその水を引き、島の中央部から北部、さらに東部にかけての乾燥地帯（およそ150万エーカー）を灌漑しようというのが、この開発計画である。²⁾ スリランカでは紀元前3世紀にはすでに、溜池をつくり水路を引いて農業が行われていたという記録がある。乾燥気候であるために古くから発達したこの小規模灌漑は、13世紀ごろま

では気候の変化や溜池に発生する蚊が媒介するマラリアが原因で下火になり、乾燥地帯は19世紀に入って植民が行われるようになるまで組織的な土地利用は行われなかった。今でも溜池や水路は乾燥地帯の各地にかなり残っていて、マハヴェリ河開発計画の一部として膨大な数の大小の水路を引く際には、これらが再利用されることもある。古くからの土台があったとはいえこのマスタープランはダムや貯水池、水路や発電設備の建築など12の巨大プロジェクトを30年かけて実施していこうというもので、技術水準の裏打ちがなく資金調達の確たるあてもない段階でのこの30年に及ぶ大規模開発というのはほとんど無謀に近い観がある。

今回訪れたシステムHという地域について、この開発計画の中で実施されている事業の、複雑で広範にわたる人々の生活との関わりを素描してみようと思う。マスタープランではマハヴェリ河の水路を変更して引いた水によって13地域を灌漑することになっており、それぞれがシステムAからシステムMと名付けられている〔図2〕。システムHはアスラーダプーラのやや南側に三角形の形に広がる、マハヴェリ河開発計画最初の下流開発地域である。コロンボを出発してキャンディに向かう道の途中で左に折れて北上していくと、やがて景色が一変して低木がまばらに生える一帯となり、ドライゾーンに入ったことが分かる。幅は狭いけれども整備された道路が続き、出発して4時間もするとシステムHのエリアに入っていた。システムと都市を結ぶ道路建設もマハヴェリ開発の一環としてプログラムに入っており、これは各システム内の農産物を最寄りのマーケットに運ぶときに非常に重要な役割を果たしている。システム内の行政組織は、移住や再定住、耕地の割り振り、水量調節から水路のメンテナンスまで、すべてを取り仕切る役所があり、プロジェクトマネージャーが統括する。システムHは8つのブロックに分けられており、各ブロックはさらに2～5個のユニットから構成される。³⁾ 指示系統はプロジェクトマネージャーからブロックマネージャー、そしてユニットマネージャーへと繋がるが、これらの職には中央から任命された人々が就いている。

システムHは70年代からすでに移住や再定住の始められた古いシステムなので、居住区（セトルメント）における移住・再定住者の家、店や集会所や教会の建築など基本的整備段階はすでに終わっており、一見したところ普通の町と変わらないと思えるほどに整った様相を見せている。プロジェクトマネージャーの話では、現在のシステムレベルでの重要課題は、より多くの水の確保と水路のメンテナンスだという。システムHからはるか南のボルゴラで流れを変えられたマハヴェリ河の水は、トンネルや水路を経て、システムHの

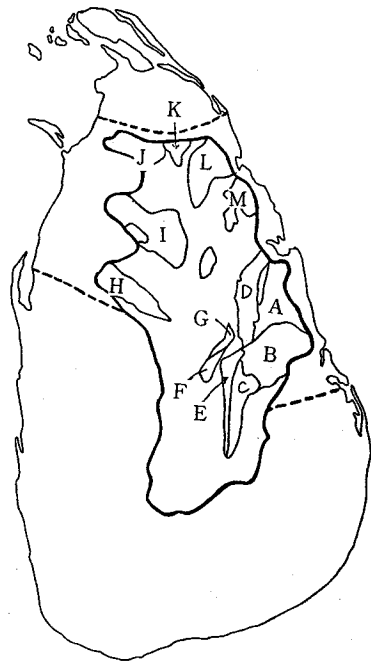


図2

東端近くにあるカラウェワ貯水池に入ってくる。一旦ここに蓄えられた水はシステムHの北の縁を平行に走る2本の水路と、南の縁を通る1本の、計3本の主要水路に分割されてシステム内に送られ、それぞれの主要水路から枝状に伸びる下位水路によって全ての灌漑地に供給されることになる。最も下位の水路になると非常に細く、草に覆われて見逃しそうになるところもあるが、いずれにせよすべての水路の長さを総計すれば相当な距離になり、メンテナンスがいかに大変な作業かが推しはかれる。またカラウェワ貯水池の広大さを目の当たりにすると、いくら乾燥期とはいってもその水が足りなくなるとは想像しがたいほどなのだが、近年とりわけ乾燥期に商品作物を栽培する農民が増えているために、水の供給を増やしてほしいとの陳情があとを絶たないという。システムHにまわしてもらうマハヴェリ河の水量については、他のシステムとの兼ね合いもあって希望どおりにはいかない。

システムHには3つのセトルメントがつくられており、もともとこの地域に住んでいた人々でセトルメントに再定住した人々、ヴィクトリアダムやポルゴラダムの建設に伴う水没で家を失って移住してきた人々、そのほか耕地不足のために他地域から移動してきた人々が住んでいる。畑はセトルメントのまわりに区分けされて広がり、それぞれが農民に割当てられるので、人によっては畑が家から遠く離れている場合もある。祖父の代からこの土地に住み、開発で一時は立ち退いたが開発後に再定住したという農民のひとは、家から歩いて10分程度のところに畑をもっており、開発後は水が安定的に得られるようになったので、祖父や父の代に比べれば米の生産に関するかぎり状況は非常によくなったと話す。農業を行う上での現時点での問題は、システムマネージャーも話していたように、乾燥期の商品作物作りに必要な水が不足することだと彼も指摘する。また農民のほとんどは商品作物をマーケットまで運ぶ手段がないので、アヌラーダプーラなどマーケットのある街からやってくる仲買人に作物を売っているが、たいていはひどく買いたたかれるという。マーケットでの商品価格に関する情報不足もまた農民の間では大きな問題になりつつある。このような農民およそ一千世帯をとりまとめているのがユニットマネージャーで、彼の業務は土地をめぐる争いの調停から栽培作物やマーケットに関する知識普及、コミュニティの集会を組織するなど多岐にわたる。集会や地域活動は、その推進主体をコミュニティメンバーに次第に委譲していくようにしているが、ユニットマネージャーを通して様々な情報が系統だてて農民に伝えられる組織がかなりしっかりとできあがっている。この組織は、逆に迎っていくとブロックマネージャーおよびシステムマネージャーを通して中央の政府に繋がっていくのである。マハヴェリ河の水の流れとともに、政府を中心とする開発の戦略、そしてそのための組織系統がシステムの隅々にまで浸透してきているという印象を受ける。

システムHはマハヴェリ河開発計画の下流開発において常にモデルとされている。1992年9月末時点で約3万1千人強の農民が定住し、そのうち2万4千人が他地域から移住してきた人々である。⁴⁾ 定住率が非常に高く、灌漑が効率よく実施されたことで、農業生産が非常に向上

し、その結果システム内の住民の活動が一層活発化しただけでなく、システムを取り囲むようにいくつかの小さな町が形成されてきており、地域全体の活性化の核としての役割を果たすようになってきている。このようにシステム内のみで考えれば現段階でかなりの成功を納めているとあってよいだろうが、システムHの開発をスリランカ社会全体と関連づけてみたときには、問題点もまたうかがえる。一つは土地不足で、移住してきた一家族に子供が3人も4人もあった場合、割当られた土地だけでは子供に分配することができない。水の配分が厳密に決められている灌漑農地では勝手に土地を切り開くというわけにもいかず、土地不足は年々深刻になるとともに居住者間の争いのタネとなっている。また、システムがまだ形成途上にあったときに建築や道路敷設に人手が必要なために他の地域から若者を積極的に集めており、基本的な建設段階が終わった今、これらの労働定住者（worker-settler）をどうするかが問題となっている。⁵⁾ さらに、セトルメントが次第に町としての活況を呈してくると、商売を目的とする人々とともに土地を持たない農民もまたセトルメントに入りこんできており、先の労働定住者とともに問題を一層難しくしている。現在のところ解決策があるわけではなく、そのために自分の土地を持たない若者や外部からの参入者は、職もなくこれといってすることもなく、セトルメントに近いマーケットのある都市に移動したり、またさらに遠いコロンボなどまで職を求めて出ていく。こうしてセトルメントは多くのルンペンの存在を生み出しており、それが社会の潜在的流動性を形成しているのである。

こういった開発の進展にとまなう潜在的な困難がシステムHにおいて今のところ表面化していないのは、このエリアの入植者が95%以上シンハラ人であるといった幸運な条件が作用しているとも言える。⁶⁾ 実際、島の東寄りにあるシステムBなどは今回訪問を希望しても危険だからといって止められたぐらい緊迫した状況だった。開発のプロセスから生み出されてくる状況が同じのものであっても、そこから生じる困難は地域ごとの固有の条件によって異なる。そのような困難が生じる原因を明らかにするには、その地域自体を含めて、開発計画全体が置かれていたコンテキストを参照する必要があるだろう。時期を少し逆上ってその状況を追ってみたい。

マスタープラン実施の社会的背景

スリランカがイギリスの植民地支配下に置かれたのは1818年、それに先立って島の中央高地を中心として存続していた王国が廃絶された。イギリスによる支配は現在にいたるまで政治・経済・社会のいたるところに色濃く影響を残しており、とりわけイギリスに代表される西洋へのアンヴィバレントな意識は、英語とプランテーションに対する人々の受け止めかたにはっきりと表れている。たとえば英語は行政を預かるエリート階層や都市の中産階級を中心に用いられ、スリランカ全体の人口からすれば英語と母語のバイリンガル（ないしトリリンガル）の割合はまだまだ低いとはいうものの、教育機会や職を得るなど社会的に極めて重要な局面では英語がものをいう。日本でもある程度バイリンガルやマルチリンガルが重宝されることには変わ

りないが、だからといって日本語しか話せない者が見下されるという状況にはない。スリランカでは英語を話せるかどうかを社会的、心理的階層をはっきりと分けており、それが用いられる人数や範囲とは比較にならないほど大きな意味と重みをもっている。そして英語を用いている人々自身、その重要性がわかって必死に身につけたのではあるけれども、その一方で、母語に代表されるような自分の国の伝統とは何なのかを繰り返し自問することになる。また、植民地の遺産としてのプランテーション農業は、被支配の記憶のなかでもとりわけ醜い局面として理解されている。私的なコーヒーのプランテーションとして始まったものがやがて植民地政府によって運営されるようになり、紅茶、ココナッツ、香辛料などの生産が軌道に乗りだすと、このプランテーションが国家経済を支える主要な経済活動になると同時に、この国は世界経済の中に組み込まれていった。農民たちはそれまで慣習的に農地を無登記で利用していたのだが、プランテーションによってそれらの土地は政府管轄下に入れられることになった。さらに、プランテーション労働はインドから連れてこられたタミール人労働者に独占的に任されたために、プランテーションは、その土地の農民にはほとんど恩恵がないばかりでなく、逆に彼らの生活の基盤を脅かすという結果を招いていた。しかしスリランカ人一般が皆経済的恩恵から除外されていたわけではなく、プランテーションによる経済活動の活発化によって財を蓄えた人々、および英語を話し植民地行政を一部担うことによって勢力を増してきた人々は、次第に新興エリート階層を作り上げるようになっていた。新興エリート階層の出現は、それまでも漠然とした区別は可能であったシンハラ人の二つのカテゴリーを明確化させた点で意義深い。⁷⁾ 新興エリート階層をなすのは主に「低地シンハラ」でシンハラ人人口の約6割を占め、都市に住み教育程度が相対的に高い。一方の「高地シンハラ」(キャンディアン・シンハラ)は婚姻規制がはっきりしており、それとわかる方言を話し、乾燥地帯の農村を地盤としている。プランテーションの恩恵はこのうち専ら「低地シンハラ」の人々にもたらされ、「高地シンハラ」を筆頭としてプランテーションによって生活を圧迫された人々の反感は、「低地シンハラ」ならびに労働を独占しているインドタミールの人々に向けられていく。1948年にスリランカがイギリス連邦の自治領「セイロン」として一応の独立を勝ちとるまでの間、スリランカの国家としてのまとまりを作りだすべく主導的役割を果たしたのは、のちに国民党を結成した勢力だったが、この勢力は新興エリート階層に支えられて、いわば「低地シンハラ」の利益を代表する集団であった。従ってこの新興政治集団が推進しようとする政策に抗して、まずその植民地政府寄りの政策を基調とする国家建設運動から離脱していったのは「高地シンハラ」人たちであり、次にインドタミールが続いた。しかし独立を達成し、以後国家を運営していく時、とりわけまだ国家建設が軌道にのっていない不安定な時期に、このような国内の足並みの乱れは大きな混乱をもたらす。どこかに求心性を求めねばならないという事情、さらには急激な増加の一途をたどる人口と土地不足に至急に対処しなければならないという状況の中で、政府は土地政策を通してまとまりのあるアイデンティティーを作り上げていこうとする。すなわち政府の土地を農

民に払い下げていく際にその対象は「セイロン人」に限られるとし、次のような「セイロン人」の定義が付与されているのである。「セイロン人とはシンハラ人、セイロンタミール、バーガー、セイロンムーア、セイロンマレー、そしてセイロンに居住するヨーロッパ人を指す」。⁸⁾ 明らかに「セイロン人」からインドタミールだけが除外されている。政府は植民地時代から引き継がれているプランテーションを基盤とする経済構造を、国の経済を支える意味でも、また自分たち新興エリート階層にとってそれが利益の源泉であるという点からも温存していこうとしていたが、プランテーションに対する農民の反感は無視することができず、結局、経済的仕組みは温存しながらもその経済活動の担い手は「セイロン人」でなければならないとする、ややすり替的な議論が行われている。そして世界大恐慌以来、その余波をかって低迷している経済と、そこから生まれる諸問題の元凶として、人々の不満の矛先がインドタミールに向くようにされている。こうして矛盾を内包しながらも求心的に「セイロン人」を作り上げていこうという努力がなされていたとき、マハヴェリ河開発計画はスタートしたのである。

マスタープランが30年に及ぶ長大な計画であることは先に触れたが、この計画は外国からの資金援助不足や国内の経済状況の悪化によって遅々として進まず、1970年から77年の間に最初のプロジェクトの第一段階（ボルゴラでのマハヴェリ河水路変更）がようやく完成にこぎつけたにすぎなかった。独立から1977年までの間にスリランカの人口はおおよそ2倍にも膨れ上がっており、土地や食料は不足する一方であるのに、開発の方は期待される効果がほとんどあがらず、結局は西洋の技術主導型の開発に対する反発と、利益を独占するエリートたちに代表されるような資本主義的メンタリティーへの反感をあおることになっていた。このように、マスタープランの行き詰まりは単に開発計画が予定どおり進まないという技術的資金的問題にとどまらず、国民党を中心とする政府指導者が取り組んでいた、「セイロン人」の創造を頓挫させることになった。「セイロン人」の創造は、新たなアイデンティティーを模索する一種のナショナリズムといえるだろうが、こちらの動きが行き詰まりをみせているとき、他方では独立以前から続いてきていた別のナショナリズムがその勢いを一層増しつつあった。これはシンハラ仏教ナショナリズムと呼ばれており、仏陀の教えを忠実に守り仏教の基本に立ち戻ろうとするプロテスタント的仏教を基調とする運動である。アナガリカ・ダルマパーラ（1864～1933）を創始者としてこの運動が始められたのは、スリランカがまだイギリスの植民地支配下にあった時期で、民族主義的色彩の濃いこの運動はその後連綿として続き、スリランカ独立の気運を高めるのにも大きく貢献していた。⁹⁾ マスタープランが実施されている時期の仏教ナショナリズム運動は、シンハラ語で教育を受け農村に基盤をおく人々、プランテーション農業などの資本主義的活動による経済的恩恵から除外されていた人々に支えられ、運動の矛先を西洋的価値観や生活様式、資本主義的メンタリティー、そしてそれらの担い手であり支え手である植民地エリートやインドタミールに向けている。仏教ナショナリズムはシンハラ語と仏教を運動の核として「シンハラ人意識」を高めようとしてはいるが、一方で西洋的価値観やメンタリティーの担い

手であるシンハラ人エリート階層をも敵にまわしており、この時点では運動の中に階級闘争につながり得る要素もまだ残されていた。しかし実際にはこの運動は、やがて民族間闘争へとかたちを変えていくことになる。一方には、国家の発展には西洋型の経済が不可欠として開発を進めつつ、その担い手として「セイロン人」を創っていかうとする流れが、他方には伝統的価値への回帰を目指す仏教ナショナリズムがあり、この二つの流れは開発計画を媒介とする恰好で次第に絡み合い、両者ともに変容しながら、異民族の対立を煽るドグマへと収斂していくのである。

2. マハヴェリ河開発加速化計画

1977年の選挙の結果ジャヤワルデナ政権が誕生すると、マハヴェリ河開発は新たな段階を迎える。牛の歩みほどこしか進まず経済効果をほとんど生み出さなかったマスタープランを見直し、即効性のある開発を行うよう計画の練り直しが行われ、その結果マハヴェリ河開発加速化計画 (Accelerated Mahaweli Development Program) が発表された。加速化計画はマスタープランでは30年かけて行うことになっていたプロジェクトを6年間で完成させようというもので、このあまりに極端な短縮のされかたにまたもや驚かされるのだが、実際には連続的に行われる予定だったものを同時平行的に進めようということで、当面開発対象とされるプロジェクトも大幅に削減されることになった。加速化というよりは規模縮小化という方が正確かもしれない。¹⁰⁾ しかし重要なのはどう縮小されたのか、何が切り捨てられたのかということであり、この加速化計画には、単に資金的条件や経済的效果などの計算ではわり切れない、政府側の別の姿勢、戦略といってもいいものが伺える。

当初12あったプロジェクトのうち5つ (ヴィクトリアダム総合開発、コトマレ水力発電計画、ランデニガラ開発、マドゥル川貯水池開発、モラガハカンダ開発) が選ばれており、これらの開発により灌漑を実施するシステムはA, B, C, DそしてHだけということになった。〔図2参照〕これらのシステムが位置しているところを一見すれば分かるように、島の中央部から東寄りにかけてが重点的に開発対象となり、たとえばJ, K, Lなどの北部のシステムは事前調査では水路建設が可能だとの結果が出ているにもかかわらず対象外とされた。¹¹⁾ この結果北部一帯はかなり広い範囲にわたって当面開発からは除外されることになった。

この地理的な選択がどういう意味を持つかには少し説明が必要だろう。スリランカにおいて民族の地域的分布が今日ほど明確な形をとるようになったのは近年のことである。スリランカにはインド南部からの人々の移住の波が何度があり、はるか昔に島に渡ってきたこのスリランカタミールの人々はおおよそ島の北部から東部沿岸にかけて住み着いた。これらの人々はタミール人といっても出自はばらばらで、ひとまとまりのアイデンティティーをもっていたわけではなく、北部や東部に住む人々が相対的に多いとはいえ、コロンボなどの都市や南西部の低

地、中央高地にも広く分布してシンハラ人たちの間で農業や商業を営んでいた。植民地支配下でプランテーション労働者として連れてこられたインドタミールの人々とも一線を画しており、独立直後にインドタミールが土地所有に関する権利を認められず、政府に抵抗した折にも、その運動を積極的に支援することはしていない。ところが、インドタミールだけを除外した「セイロン人」としてのアイデンティティーづくりが行き詰まり、シンハラ仏教ナショナリズムが「シンハラ語」と「仏教」を旗印として勢力を増してきたために、スリランカタミールは徐々にインドタミールとともに排斥の対象となっていく。植民地経済の恩恵から除外されていたという点ではスリランカタミールも仏教ナショナリズムの担い手たちと共通するところがあったのだが、言語と宗教が運動の核とされていたために、彼らにはその運動に参画する余地が残されていなかった。こうしてスリランカタミールたちは「シンハラ人仏教徒」に対する「タミール人ヒンドゥー教徒」としてインドタミールたちとアイデンティティーを一部共有するようになり、次第に島の北部や東部沿岸地帯へと活動の拠点を移していくことになるのである。

このような経緯をふまえて加速化計画の開発対象地域を見るならば、それがタミール人の多く住む地域を意図的に除外していることはあまりにも明らかだろう。加速化計画のスタート段階でこのように開発対象地域を限定したことがそれ以降の民族の明確な棲み分けの下地となり、以後加速化計画が進むに従って乾燥地帯のシンハラ化は一層顕著になっていく。乾燥地帯の灌漑地への移動が激しかったのは南西部の低地にいた農民であったが、この低地は急激な人口増加によって農地不足が特に深刻になっていた。これらの農民の移動に加えて、政府は農民以外のシンハラ人の入植地入りを積極的に推進している。また、ダムや貯水池の建設によって立ち退いた農民のうち、新たな灌漑地に定住した人々の割合は統計で見るとシンハラ人の割合がかなり高い。¹²⁾ ピープルズの報告によれば1985年末の時点で、システムB、C、G、Hの入植家族数は全部で約5万家族、そのうちシンハラ人以外は約2300家族にすぎない。¹³⁾ 結局乾燥地帯の民族比率はシンハラ人が圧倒的に高いという結果になっており、1985年に政府が「灌漑により耕作可能になった土地は入植した民族の比率に応じて分配する」と決定したことによって、ほとんどの灌漑農地はシンハラ人に分配されることになった。¹⁴⁾ 開発以前に乾燥地帯に土地をもっていたタミール人の中には、灌漑後に耕地が割り当てられなかった者もあり、このような入植をタミール人が「シンハラ人によるタミール人の土地の征服」と感じたのも無理からぬ部分もある。

いずれにせよ、マハヴェリ河開発加速化計画は1977年の開始以降、海外からの資金援助や技術協力を梃子にかなりの速度で進められていく。コトマレ開発では貯水池およびダム建設に続いてトンネル水路の建設が行われ、その完成は1983年であった。また加速化の中でも大きなプロジェクトであったヴィクトリア総合開発は1984年にヴィクトリアダムが完成し、引き続き発電所やトンネル建設、流域開発が進められている。いずれのプロジェクトにおいても、まずダムや貯水池、水路の建設が最初に行われる。それによって利用可能になった水をもとに下流

域の灌漑を行うのだが、加速化計画は非常に短い期間でこの両方の段階を完成させようとするために、上流の開発と下流の開発のタイミングを合わせるのが極めて難しい。上流の大規模開発は4箇所ではほぼ同時に開始されており、ダムや水路建設による住民の立ち退きは待たなしで進む。それに対して耕作可能な土地が準備できるのは時期的にかなり遅くなるため、その間人々は、例えば紅茶の栽培などの慣れない仕事を行うか、あるいは整備途上の灌漑農地でなんとか農業を行うかしなければならない。加速化計画で移住や再定住の対象とされていたのはおよそ11万家族の農民で、このうち1988年の段階で再定住が完了したのは、約5万6千家族だけであった。¹⁵⁾ 定住していない人々の中には、一旦は灌漑地に移住したが水がないために農業ができず、また移動した者、80年代に入って激化した民族間の紛争のために定住地から立ち退かざるをえなくなった者もあるが、いずれにしてもマスタープラン実施以来の社会的流動性がさらに急速に高まったことは確かである。こうした社会的不安定は80年代にはいって、対立や抗争というかたちで表面化してくる。頻発する抗争、とりわけ1983年7月の大規模な暴動（シンハラ人によるタミール人虐殺）などの経緯を見れば分かるように、この頃になると不満や緊張はシンハラ人とタミール人との民族抗争という明確なかたちをとっている。マスタープランの時期に追求されていた「セイロン人」アイデンティティーは空中分解してすでに跡形もなくなっており、暴力性を増してきた仏教ナショナリズムがますます「シンハラ人」による他民族排斥を煽っている。ナショナリズムは次第にこの仏教ナショナリズムの方に収斂してきており、仏教ナショナリズムの方もまた、階級間の闘争という色合いがあせて、ひたすら民族的主張が覆われていくのである。

こうしてマハヴェリ開発省の発効するパンフレットの文言、大統領や大臣の開発に関する発言は、以前にも増して仏教的価値を前面に押し出したものになっていく。1985年、コトマレ貯水池の竣工を記念して執り行われたjala puja(奉水儀礼)は、この時点で政府が加速化計画によって具現化したいと考えているものを余すところなく語っているように思われる。N. S. テネクーンの報告に従ってこの政治的儀礼を見てみよう。¹⁶⁾

jala puja (奉水儀礼)

コトマレ貯水池はキャンディのおよそ20キロメートル南にある。この貯水池およびダムの完成によって当時需要が非常に伸びていた電力の供給は各段に改善されることになった。近代技術の域ともいえる巨大ダムと発電所の完成を記念して行われた儀式は jala puja と呼ばれる極めて仏教的色彩の濃いもので、先端の技術と伝統という両者の対比は際立っている。夜明け近く、まず竣工した貯水池のほとりで仏教僧がピリット¹⁷⁾を行う。続いてコトマレ貯水池の水が30の銀の水壺にそれぞれ納められて、それらの壺はすべていったん古都キャンディに運びこまれる。キャンディには仏教徒にとって信仰の中心をなしている、金色に輝く仏歯寺があり、運び込まれた30の水壺のうち2つはこの仏歯寺に届けられ、ここでも僧のピリットが行われた

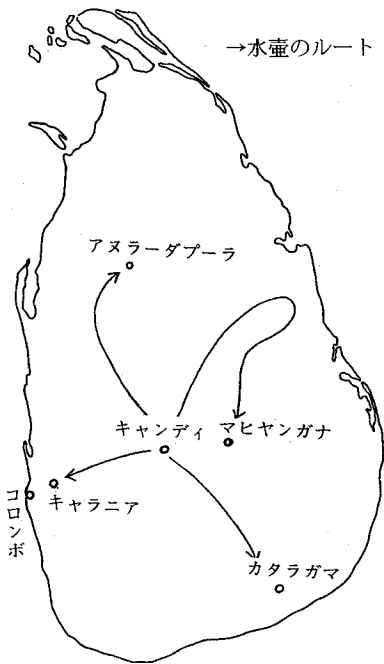


図 3

のち、コトマレの「最初の水」が奉納される。残りの28壺はキャンディを発し、そこからはるばる国内の4つの地点に向けて巡礼さながらの旅に出ることになる。マハヴェリ河開発計画の中で jala pujaが行われるのはこれが初めてではない。1976年のボルゴラダム、1985年のヴィクトリア水力発電所の完成時につづいてコトマレは3回目になる。いずれも前回の式次第の大枠を踏襲しながら細部には変更が見られる。水壺が運ばれる先もそのひとつで、コトマレの儀式の場合、水壺はそれぞれ4つずつが、北はアヌラーダプーラ、東はマヒヤンガナ、西はキャラニア、そして南はカタラガマへ向けて運ばれていった。水壺はキャンディペラヘラ祭の折に行進する像のように伝統的なモチーフで飾りたてられたトラックに乗せられ、目的地までドラマーに先導されながら仏教僧とともにゆっくりと進む。道の両脇は旗などで飾りつけが施され、住民がと

きおり水壺を運ぶトラックに花を捧げる。立ち寄る先々で祝辞をうけ、開発省の役人がそれに応じるという光景を繰り返しながら水壺は最後には、アヌラーダプーラの菩提樹に、そしてマヒヤンガナ、キャラニア、カタラガマではそれぞれヴィハーラ（仏塔）にたどり着くのである〔図3〕。

出発点のキャンディをはじめとしてこれら水壺のもたらされる地点はいずれも仏教徒にとっての聖地で、人気のある巡礼地になっている。このうちカタラガマは仏教徒だけでなくヒンドゥー教徒、イスラーム教徒にとっても同様に聖地とされていたが、オーバーセーカラが述べるように、仏教ナショナリズムの運動の高まりとともに仏教の聖地としての性格を非常に強くもつようになっていた。¹⁸⁾ 水壺の行進はまさに巡礼であり、この巡礼によって象徴的に表されているのは、テネクーンも指摘するようにマハヴェリ河開発の及ぶ地理的な境界である。これら4地点への行列はまっすぐに目的地に向かうのではなく、たとえば北のアヌラーダプーラの場合であれば、灌漑地域のシステムHを通してからアヌラーダプーラに入る。行列のルートが最も目立って迂回するのが東のマヒヤンガナへの場合で、キャンディを出ると一旦北へ向かい、その後システムBおよびシステムCを通り抜けて円弧を描くようなかたちでマヒヤンガナに戻ってくる。壺に納められた水は、開発によってもたらされる恩恵をあらわすとともに、水を司る者の権威の正統性そのものでもある。この水は仏教徒の巡礼になぞらえられながら、仏教の聖地へいたる。そしてこれら4つの地点によって示されるのは開発によって生み出される新たな国、正統なる権威の及ぶ領域であると同時に、古来からの仏教の伝統によって統合される仏教

国の姿なのである。さらにそれは新たな国であると同時に、その昔スリランカの水利文明の黄金時代であった「ラージャ・ラタ」への回帰もまた示唆している。数限りない溜池と寺を擁していたこの古代王国は、水の恩恵によって支えられ仏教の教えによって導かれた王国として、多くのシンハラ人にとって常に立ち戻るべき理想の国として思い浮かべられるという。盛大に執り行われる jala puja は最も近代的開発によって創りだされる国を、歴史の懐にある最も古い伝統の国の姿と重ね合わせることで、この開発のもつジレンマを昇華させてしまおうとしているかのようだ。

この儀礼によって浮かび上がってくるのは新たな「スリランカ人」の姿であり、jala puja の儀礼はこの「スリランカ人」の意味するものを顕在化させる。すなわちマハヴェリ河開発計画の恩恵に浴する者（水壺の通る地域の人々）、そして仏教徒、さらには古代王国からの系譜を共有する者のみが「スリランカ人」だという主張がそこには見て取れる。独立以来、植民地エリートと農民の間にあった対立、近代化の手段として用いられる仏教に対する原理主義的仏教の挑戦といった複雑な様相、そしてこの複雑さの中にかろうじて残されていた少数民族の居場所は開発が進むにつれて削ぎ落とされていき、事態は単純明快な「スリランカ人」と「非スリランカ人」という図式に導かれていく。近代化への疑問、経済不振からくる不満、社会的不安定、これらはすべてまとめて捌け口を「非スリランカ人」に見いだすことになったのである。

加速化計画が加速したもの

マハヴェリ河開発加速化計画とは実際何だったのだろうか。計画の目標はマハヴェリ河水路変更による灌漑とそれによる農産物生産量の増加であり、ダムおよび発電所建設による電力供給増、そして雇用の創出だった。これらの目標がほぼ達成されたという数字上の証拠は数多く提出されている。しかしこの開発は、計画の文言が表現する範囲を大きく踏み越えてスリランカ社会に根底的で複雑な変化を、と同時に非常に困難な事態をもたらしている。ひとつには乾燥地帯の民族間比率の変化が挙げられる。シンハラ人が乾燥地帯全体においても、また灌漑地のシステム内においても圧倒的に多数を占めるようになったため、土地の領有を巡ってタミール人やその他の少数民族との間に実際的な、また心理的な緊張を高めることになった。下流開発が行われる各システムは、開発当初においては水の供給が安定しなかったり定住が進まないなどの問題を抱えて社会的動揺を生み出す原因にもなるが、セトルメントができてから年月が経ち、町としての機能が果たされるまでになってくると、システムHに見られたように人々の経済活動に対する意欲が非常に高まってくる。商品作物栽培の拡充やマーケットでの取引に関する知識の獲得などについては、次第にユニット単位の協力体制も築き上げられ、それが一層経済活動を刺激することになって、徐々にではあるが人々の生活が向上してきている。しかしシステムに耕地を与えられるのがシンハラ人農民に偏っているために結局はシンハラ人とその他の民族、とりわけタミール人との間の経済格差が広がるという結果を招いており、加速化計

画の進展に伴い、経済格差が民族差を示唆するような状況が形成されつつある。経済格差ということであれば、未だに植民地以来のエリートと農民、あるいは低地シンハラと高地シンハラの間には確かに格差があるのだが、民族差の方がより強調される傾向にある。

半ば意図的に進められてきたシンハラ化、シンハラ人中心の開発は、民族の地域的棲み分けを決定的にすると同時に、民族間（とりわけシンハラ人とタミール人の間）の経済格差を生み出し、それを顕在化させている。こうして「スリランカ人」と「非スリランカ人」の差異が過度に強調され、問題の複雑さは両者の単純な対立図式の中に押し込められていった。

加速化計画の進展とともにあらわれてきた「スリランカ人」を創りだそうとする動きと、仏教ナショナリズムがどのようにして絡み合うようになっていったか、また相互に影響しあうことによって両者がどう変化し、次第に暴力性を高めていったかについては、詳細な検討が必要だろう。少なくともここで示唆できることは、加速化計画の経緯は、仏教ナショナリズムの主張がより有効なイデオロギーとして作用するのに力があつたのではないかということだ。ここでイデオロギーとは、ギアツが文化体系として見事に分析してみせた、文化的緊張を含んだ社会的心理的緊張への反応という意味で用いている。¹⁹⁾つまり、スリランカも植民地支配などから独立したその他の新興諸国家の例に漏れず、伝統的政治ないし伝統性からは脱した（あるいは伝統的社会において理解可能であった象徴的枠組みは崩れた）ものの、新たな政治的状况に対処するための枠組みはまだ模索中であり、この不安定さの中で極度の文化的緊張状態におかれていた。このように「社会の最も広汎な文化的方向付けも、最も实际的で「実用的な」方向付けも、ともに政治過程の妥当なイメージを与えるに充分でなくなったときに、イデオロギーは社会的政治的な意味と姿勢の源泉として決定的重要性を帯び始める」。²⁰⁾方向を見失った混乱の中で仏教ナショナリズムは「シンハラ語」と「仏教」を核に「仏教の伝統への回帰」「シンハラ人の仏教国の設立」を目指した。こういった方向づけ自体、文化的コンテクストの中からはしか生まれてこないのだが、そこで採用された方向づけが、現実とその社会の有効な導きの糸となるかどうかはまた別の問題である。スリランカの場合、進行しつつあった加速化計画は乾燥地域での民族比率を大きく変化させ、民族間の経済格差を人々がそれと分かるほどに明らかかなものとしていった。このような変化は仏教ナショナリズムが主張していた「シンハラ人仏教徒」と「それ以外の人々」との差異を否が応にも際立たせることになり、仏教ナショナリズムの主張する「方向づけ」が正しいとする現実的な根拠を与えるように作用していったのではないだろうか。

先にも述べたように仏教ナショナリズムのもともとの担い手である人々と、シンハラ人仏教徒であり同時に植民地エリート（西洋的価値観やメンタリティーの担い手）であるような人々との間には、微妙な緊張関係が存在していた。しかし、イデオロギーが一旦有効な解釈格子、すなわち「理解不能な社会状況を意味あるものとし、その状況の内でもって目的をもって行為することが可能となるようその状況を読み取る」ための体系として人々に受け入れられたならば、それ

以後は複雑な現実に合わせてイデオロギーが修正されるというよりは、現実のほうが強引にその解釈格子に当てはめられていく。つまり微妙な緊張関係はさておいて、仏教ナショナリズムのイデオロギーが「激しく防衛される」ことになるのである。²¹⁾ こうしてシンハラ人同士の緊張関係は影が薄くなっていくのに対して、異民族間のそれは、より一層鮮明さを増していった。

曖昧さを含んだ方向性の模索であったイデオロギーは、次第にその曖昧さや複雑さを削ぎ落としながら硬直化し、スリランカの場合には暴力性を帯びるようになっていく。タンバイアも民族間闘争のひとつの要因として述べている、「イデオロギーのドグマ化」の経緯²²⁾ は、それ自身が分析の対象となるべき複雑なプロセスであり、ここで取り扱える範囲を超えているのだが、少なくともマハヴェリ開発の経緯は、儀礼的に「スリランカ人」の国を現出させるなど、目に見えない差異を具体的に把握できるような現実として提示することで、そのドグマ化のプロセスを一層加速化したということは指摘出来るだろう。マハヴェリ河開発計画そのものが民族間紛争のような暴力を「生み出した」わけではない。イデオロギーがとる方向づけや、それが硬直化した結果どのような現れ方をするかは、開発とは異なったレベルで進行するものだ。しかし、加速化計画は入り組んでいた異文化間関係を徐々に明確によりわけ、文化的な差異を作りだしながら、その差異を固定化させるような社会基盤を整えてきた。それまではばらばらに流れていた水が寄り合わされて一つの水路にまとめあげていかれるように、いったん社会的緊張の糸が切れた合には、激しい情動が流れ込んでいく水路を、この開発は準備してしまったともいえる。こうして堰を切って溢れだした不満や怒りは、その水路に沿って一気に「非スリランカ人」の方へなだれ込んでいくのである。

結 び

開発の一つの局面として文化的には西洋対伝統という対立図式で物事が語られ、説明されることがしばしばある。また経済的には植民地経済とその土地固有の伝統的経済との二重経済という枠組みで語られることが多い。しかしスリランカの独立以来の経緯、マハヴェリ河開発計画の進展に伴う文化的社会的変化は、西洋対伝統あるいは二重経済という整理のしかたでは割り切れない。大規模なダムや水路、発電所建設となれば西洋の近代的技術を全面的に採り入れる必要があり、単に技術面だけではなくこれらの計画を秩序立てて効率的に展開するための機構もまた、西洋型の組織を参照することになる。その点ではたしかに開発は近代西洋的指向性をもっているのだが、スリランカの水系開発の場合にそれが一筋縄でいかないのは、水系を利用して農業を営み豊かな生活を実現するという行き方そのものは古くからこの国の歴史的伝統に通じるという点である。つまりマハヴェリ河開発計画のような水系開発は近代西洋側を向くと同時に伝統回帰を示唆するという微妙な性格を持っていた。だからこそ、スリランカでは西

洋と伝統、二重経済といったものを対立させつつ重ね合わせていくという矛盾に満ちた道が模索されたのだ。その矛盾は開発の結果生じてきた状況にもそのまま映し出されている。スリランカ全体として見たときに、経済成長が確実に達成されている一方で、国内の異文化間の緊張はほとんどその将来について悲観的にならざるを得ないほどに、深刻なものとなっている。

キャンディ近郊のガダラデニアという石造寺院にはヒンドゥーの仏師が彫ったという仏像があり、その仏の表情は異文化が融合して生み出される若々しさと、その後の変化を胚胎する粗削りな強さをたたえている。シンハラ人が回帰したいと願う仏教国ラージャ・ラタもまた、このような豊穡な異文化の融合の上に成り立っていた。現代に立ち現れた新たな「スリランカ人」の仏の国、鋳型のように堅固な官僚組織という基盤の上に壮麗な儀礼を介して築き上げられた現代のラージャ・ラタの中には、異文化が共存する余地を見いだすのはきわめて難しい。

注

本稿は文部省国際学術研究「異文化共存の可能性」に関して、1993年7月～8月に行った実態調査研究に基く報告である。

- 1) 水とスリランカの人々との様々な関係については、J.B.ディサナヤカが近著の中で宗教とのかかわりも含めてまとめている。

Disanayaka, J.B., 1992 *Water in Culture*. The Ministry of Environment and Parliamentary Affairs in Sri Lanka.

- 2) Abeyesinghe, A., 1990 *The Accelerated Mahawerli Program*, pp.9-16. The Center for Society and Religion, Colombo.

マハヴェリ河開発のマスタープランについては次の文献も参照。

Karunatilake, H.N.S., 1988 *The Accelerated Mahaweli Programme and Its Impact*. Center for Demographic and Socio-Economic Studies. Sridevi Printers Ltd., Dehiwala.

- 3) システムH発行資料

SYSTEM-H, Mahaweli Economic Agency of the Mahaweli Authority of Sri Lanka, Tambutegama.

- 4) *ibid.*, p.2.

- 5) *Mahaweli Projects and Programme*, 1983, p.63. Information Service of the Ministry of Lands and Land Development and the Ministry of Mahaweli Development, Colombo.

- 6) 1993年 6月現在のシステムHにおける民族別定住家族数と割合は次の通り。

シンハラ	30300	家族	(95.73%)	
タミール	34		(0.11)	
ムスリム	1281		(4.05)	
その他	36		(0.11)	計 31651家族

Progress Report Financial and Physical as of June 1993 による。

- 7) Samaraweera, V., 1992 *Land, Labour, Capital and Sectional Interests in the National Politics of*

Sri Lanka, p.10. Studies in Society and Culture, pamphlets 3, Colombo.

8) *ibid.* p.15.

9) アナガリカ・ダルマパーラとシンハラ仏教ナショナリズムの関係については次に簡潔にまとめられている。

Disanayaka, J.B., 1992. "Anabgarika Dharmapala and Sinhalese Buddhist Nationalism." (「アナガリカ・ダルマパーラとシンハラ仏教ナショナリズム」『思想』1993年 1月号, 岩波書店)

10) マハヴェリ河開発加速化計画のプログラムの内容については以下を参照した。

Mahaweli Projects and Programme. 1983, 1984, 1985. Ministry of Mahaweli Development.

11) Peebles, P., 1990 "Colonization and Ethnic Conflict in the Dry Zone of Sri Lanka, p.46. *Journal of Asian Studies*, 49, No.1, pp.30-55.

12) Progress Report: Financial and Physical as of June 1993.

13) Peebles, P., *ibid.*, P.47.

14) *Ibid.*, p.47.

15) Abeysinghe, A., *ibid.*, p.35.

16) Tennekoon, N.S., 1988 "Rituals of Development: the Accelerated Mahaweli Development Program of Sri Lanka". *American Ethnologist*, vol.15, No.2, pp.294-310.

17) パーリ語のバリッタ (paritta)。病気や災難などから身を護り、幸福を祈願する護呪経典、およびその経典の朗唱を行う儀礼。

18) Obeyesekere, G., 1977 "Social Change and the Deities: Rise of the Kataragama Cult in Modern Sri Lanka". *Man* 12(3):377-396.

19) Geertz, C., 1973 "Ideology as a Cultural System. In *The Interpretation of Cultures*, pp.193-233. (「文化体系としてのイデオロギー」『文化の解釈学Ⅱ』1987, 所収。岩波現代選書)

20) *Ibid.*, p.219.

21) *Ibid.*, p.220.

22) Tambiah, S.J., 1986 *Sri Lanka*, pp.57-64. The University of Chicago Press, Chicago.



Cultural Co-existence and Economic Development

Masako OKAMOTO

Economic development is sometimes accompanied by tension or even conflict between members of different ethnic groups, societies, and cultures. In Sri Lanka, a big multipurpose development project, Mahaweli Development Program, has caused very serious ethnic conflict, particularly between Sinhalese and Tamils.

In this article, I review the details of this Program, including its historical background, and discuss how it has affected or reorganized ethnic relations in Sri Lanka.

The aim of the Mahaweli Program, launched in 1968, was to develop the irrigation and hydroelectric potential of the Mahaweli river, and, at the same time, to generate employment. The original plan (Master Plan) included 13 irrigation areas which scattered from the central to the northern, and from the central to the eastern parts of the island. But when the plan was revised and scaled down in 1977 (this new plan is called the Accelerated Mahaweli Development Program), benefits from the new program were restricted to those regions where the majority of the population were Sinhalese.

The social consequences of the Accelerated Program have been:

1. change in the ethnic ratio in the highland dry zone. The proportion of Sinhalese has dramatically increased and Tamils have been pushed back toward the northern and eastern rims of the island.
2. creation of a large mass of proletarians as a result of migration and the lack of cultivable land. This trend has deposited large numbers of young people who become potential rioters in the event of conflict.
3. a rise of the standard of living in the irrigated areas and widening of the economic difference between Sinhalese who were given agricultural land and the Tamils who were not.
4. centralization of power through bureaucratic organization of the water management system.

Even before the launch of the development program, a kind of class conflict existed between rich, elite Sinhalese who benefited from the plantation economy, and poor peasants, both Sinhalese and Tamil, who were deprived of that prosperity. This complicated ethnic relations in the area.

However, as the development program has proceeded, the economic differences between Sinhalese and other ethnic groups have become clearer. Political rituals and development discourses adopted by the Mahaweli Ministry have also acted to make more distinct the cultural line between

Sinhalese and others.

This process gradually connected to the Sinhalese Buddhist Nationalism which has grown up since Sri Lanka's independence. This nationalist movement, which was originally a protestant Buddhist movement, has become chauvinistic and acquired racial overtones in its claim that the Sinhalese are the only true heirs to Sri Lankan tradition.

It seems reasonable to conclude that the Mahaweli Development Program 'accelerated' the process of dogmatization of nationalist ideology, and so produced simple ethnic confrontation where once there had been complex relations among ethnic groups.